

手賀沼通信(第330号)

Eメール：nittay@jcom.home.ne.jp
<http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai>

<http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/>
<http://tegatu2.web.fc2.com>

新田良昭

6月号に続いて北村尚巳さんのエッセイです。出身地の小諸に関する話題で、過去にいろいろな会で報告されたものを取りまとめられました。

特別寄稿

小諸と島崎藤村と明治学院大学、そして出石そばの由来 北村尚巳

私の生まれ故郷は長野県小諸市です。高校を卒業するまでの18年間を過ごしました。本稿は、その小諸に纏わるお話です。

11月第3週目の金曜日に東京白金台にある明治学院大学のキャンパスで毎年クリスマスツリー点灯式が行われる。そこに小諸市の小学校の生徒が招かれクリスマスの歌を合唱する。小諸市には小学校が6校あり、輪番で出演している。何故小諸から小学生が？ それは、小諸市にゆかりの深い島崎藤村が、明治学院の第1期卒業生であるというつながりから、小諸市と明治学院大学は、文化、産業、教育、学術等の分野で相互に協力し、相互の発展と人材の育成に寄与することを目的として、平成18年8月22日、「協働連携に関する基本協定」を締結したことにある。

島崎藤村は明治32年、小諸義塾（私塾）に英語と国語の教師として赴任し、足掛け7年ほどを小諸で過ごした。小諸義塾の塾長は木村熊二と言う人で、出石藩の藩儒桜井石門の次男として京都に生まれ、5歳で出石に移った。木村熊二は、日本のキリスト教牧師・教育者を務め、明治期、妻の木村鏡子とともに東京において明治女学校を創設、またその後移った長野県小諸で小諸義塾を開設した。牧師として島崎藤村に洗礼を施したことで知られ、のちに藤村を小諸義塾の教師に招いている。ところで、小諸城の初代藩主は仙谷秀久であった。秀吉が天下統一を果たすと、北条氏征伐のための小田原城攻めの軍功によって秀久は5万石で小諸に封ぜられた。関ヶ原の戦いが起きると中山道と北国街道を結ぶ交通の要所である小諸を引き続き

鎮撫し、信濃に徳川秀忠が着陣するとこれを単騎で出迎え、真田攻めの為に小諸を本陣に定めた秀忠軍に参陣した。後に秀忠が家康の世継ぎとして征夷大將軍に任ぜられると特に重用されるようになる（準譜代大名）。所領面では旧領を安堵され、幕藩体制において信濃小諸藩の初代藩主となった。慶長19年（1614年）、江戸から小諸へ帰る途中に発病し、武州鴻巣にて死去し、家督は三男・忠政が継いだ。忠政は、小諸藩の第2代藩主となり、後に信濃上田藩の初代藩主、出石藩仙石家2代を務めた。

現在、兵庫県出石と言えば『皿そば』が名物として有名ですが、その源流は小諸と上田にあります。

江戸時代中期の宝永3年（1706年）に出石藩主松平氏と信州上田藩の仙石氏（仙石政明）がお国替えとなった。

その際、仙石氏と共に信州から来たそば職人の技法が在来のそば打ちの技術に加えられ、出石そばが誕生した。

小諸から上田へ、そして出石へと信州そばが繋がりに、出石出身の木村熊二が小諸義塾塾長となり、島崎藤村へと繋がって、明治学院大学と小諸市の協働連携へと繋がった一席のお話しでした。

余録①：小諸城址の懐古園（三門）入り口に徳川秀忠が腰掛けたと言われる石（秀忠公憩石）がある。



徳川家康が石田三成と激突した天下分け目の関ヶ原の戦い

に着陣する中、家康の子でのちに二代目将軍となる徳川

秀忠は慶長五年（1600年）、上田城にいる真田氏征伐（第二次上田合戦）のため徳川本隊として数多の重臣を率い3万8千の大軍勢で宇都宮から小諸に入りました。

当時21歳で初陣であった秀忠は大手門（城の玄関口）から入城し三の丸入口の三の門脇の石に腰かけたとき、その石が現存する「徳川秀忠憩石（いこいいし）」と伝わります。

腰かけ石ではなく憩石と名付けられているのは長旅の疲れをここで取り去り、二の丸に入場する前にしばし憩の時を持ったからでしょうか。

～戦国ウラ話～

小諸城二の丸に布陣した秀忠でしたが、真田氏攻略に時間を要したことにより、父・家康の待つ関ヶ原の戦い本戦に遅参してしまいます。（こもろ観光局）

家康に叱責される秀忠の弁明に家臣であった仙石秀久が身を挺して奔走したこと、秀忠は將軍になると秀久を重用するようになります。

余録②：小諸市にある二つの県立高校が令和8年統合され、新しい校名は『長野県小諸義塾高等学校』を予定している。統合されるのは小諸商業高校と小諸高校。小諸高校は県内で唯一音楽科がある。



もう一つ付言すると、長野県立高校は、どこも校名に『県立』が入っていないことをご存じでしたか？

他にも北海道や宮城県も『〇立』が付いていないそうです。私の母校の名称も「長野県上田高等学校」。入学した時は「上田松尾高等学校」でしたが、2年生になる時に「松尾」がとれてしまいました。長野県の高校は「松本深志」「諏訪青陵」「飯田長姫」

など、都市名プラス趣のある校名が残っており、由緒ある「松尾」が取れてしまったのは残念に思います。

余録③：校門「古城の門」

江戸期上田城三の丸藩主居館の表御門であった。上田城は天正11年(1583)に築城が開始され、完成後は真田昌幸が城主となりました。その後徳川軍によって2度攻撃されるものの落城しませんでした。

慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦後に昌幸・信繁父子が九度山（和歌山県）に幽閉されると上田城は建物は壊され、堀なども埋められる「破城」が行われました。昌幸の後にこの地を治めることになった長男の信之は城の復興はせず、三の丸に屋敷を構えて政治を行いました。

元和8年(1622)に信之が松代（長野市）へ領地替えとなると、小諸城（小諸市）から仙石忠政が入りました。（上田市 上田城総合サイト）

特別寄稿

小諸の高浜虚子

北村尚巳

近代俳句の巨匠 高浜虚子（1874年〈明治7年〉2月22日 - 1959年〈昭和34年〉4月8日）は、昭和19年9月、70歳の時に五女である高木晴子一家と共に長野県小諸町へ疎開する。疎開先に小諸を選んだのは、以前より五女の晴子と小諸の小山家とは交流があり、一度小諸を訪ねた虚子と、後日鎌倉の虚子を訪れた小山榮一の気が合ったことなどから、虚子は小諸で戦火を逃れることに決めたといわれている。



昭和22年10月までの3年1ヶ月を小諸で過ごした虚子は、小諸での疎開生活の様子を「小諸雑



記」にまとめ、「小諸百句」を生みだした。

小諸時代に住んでいた家は、「虚子庵」として小諸市が所有し、現在一般公開されている唯一の虚子旧宅で、当時のままの姿で保存されている。

昭和十九年九月四日鎌倉より小諸の野岸*といふところに移り住み昭和二十一年十月の今日まで尚ほ續きををり。鎌倉の天地戀しきこともあれど小諸亦去り難き情もあり。二年間此地にて詠みたる句百を集めたり。

何をもて人日じんじつの客もてなさん
鶏にやる田芹なき摘みにと來し我ぞ
鎌倉は今さゝ啼なきに冬椿

*「虚子庵」の近くには、私が学んだ野岸小学校があります。

特別寄稿

小諸の若山牧水

北村尚巳

かたわらに 秋ぐさの花 かたるらく ほろび
しものは なつかしきかな

明治43年(1910)は、3月に文芸誌『創作』を創刊、4月には『別離』を出版し、牧水は一躍歌人としての名声を博した。しかし、5月8日付の手紙に「油の断えた機械の様な赤錆びた生命、(略)一昨年から今年にかけての僕は正しく右の機械であった」と心身の疲労困憊を訴えている。この年、小枝子が女兒を出産。姦通罪が生きていた時代、戸籍上人妻である小枝子、しかも小枝子と同居していたその従弟と彼女との関係も疑われ、生まれた子は里子に出されたものの養育費の負担もありと、八方塞がりの中、『創作』の編集を友人に託して牧水は東京を脱出する。

9月2日東京を発った牧水は、まず大学時代の友人飯田蛇笏を山梨県境川村(現笛吹市)に訪ね10日ほど滞在する。蛇笏が後に明らかにしたところによれば、この時蛇笏の祖母は瀕死の床にあり、牧水が立ち去った3日後に亡くなったという。牧水はそれを知らぬまま、13日の夜10時過ぎ浴衣一枚で小諸駅に降り立ち、岩崎樫郎が勤める任命堂田村病院に身を寄せる。そして11月16日まで2ヶ月ほど逗留するのである。『路上』483首の約2割をしめる歌がこの時生まれている。

『若山牧水 さびし かなし』は、田村病院院長の孫田村志津枝氏が、家族や関係者から聞いた「牧

水伝説」から牧水像を追ったものであるが、牧水の小諸滞在が長くなった理由について触れている。それによると、岩崎に宛てた全集未収録書簡「例のゴノ氏がまた暴威を揮ひ始めて、目下では電車にすらよう乗らぬ身体になつてゐる」を挙げ、牧水の小諸滞在は「ゴノ氏」(淋病)の治療が大きな目的であつたろうと推測している。しかし、小枝子の突然の小諸訪問等によって完治しないまま東京に戻り、先の書簡のような事態になったのだった。

(出典：<https://yakusi.atukan.com/>)

若山牧水＝旅を愛し、旅にあつて各所で歌を詠み、日本各地に歌碑がある。大の酒好きで、一日一升程度の酒を呑んでいたといい、死の大きな要因となつたのは肝硬変である。

第四歌集『路上』(明治44年9月発行)に収録されている“(明治43年)9月初めより11月半ばまで信濃國浅間山の麓に遊べり、歌30首。”

秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の浅間の寂しくあるかな

胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤とんぼ等が来てものをいふ

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな

しらたま
白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ



小諸城址(懐古園)の石垣の大きな石に「かたわらに秋ぐさの花

かたるらく ほろびしものは なつかしきかな」の歌が刻まれている。

手賀沼通信ブログ抜粋

米寿のお祝いをしてもらった(No. 1872)(令和7年1月3日)

2025年1月29日に88歳の米寿を迎えます。そのお祝いを1月1日の夜、長女宅で開いてくれました。

我が家の家族は私と妻、長女夫婦と男の孫2人、長男夫婦と孫娘1人、合計9名です。

最初は全員我孫子に住んでいましたが、男の孫は社会人となり我孫子から離れました。

それでもお正月にはみんな集まって「どん亭我孫子店」で食事を共にしていました。ところが「どん亭」が店を閉めたため、今年は長女宅に私の米寿のお祝いを目的に集まったのです。



長女宅では80歳の傘寿のお祝いもしてくれています。その時から8年たち、私は老いましたが、孫たちは社会人と大学生になりたくましくなりました。みんなの元気そうな顔を見て、家族全員が無事に過ごせたことをつくづく幸せに感じました。

豪華な食事のほかにその場でサプライズのプレゼントをもらいました。私の似顔絵の額縁と「良昭」の名前入りの日本酒です。どちらにも誕生日と「祝米寿」との文字とうれしいメッセージが入っていました。

このプレゼントは、長男がネットでこういうサービスを提供するところを探して依頼したものです。私のような老人には考えもしないことで、今の世の中の進歩を実感しました。

会社の同僚や高校や大学の同級生は鬼籍に入った人が増えました。

弟2人と妹1人の4人兄弟のうち、残念ながら下の弟と妹は米寿を迎えることなく亡くなりました。

1つ違いの弟と6歳下の妻は無事に米寿を迎えられるよう祈っています。

私が88歳の米寿を迎えられた（まだ1か月ほどありますが）のは、妻を始め家族のおかげと思っています。深く感謝します。また今回のお祝いを企画し実行してくれたみんなにもお礼を言いたいと思います。

イチローさん、野球殿堂入りおめでとう（NO. 1876）（令和7年1月23日）

2025年1月21日、野球のイチロー（鈴木一朗）さんが、全米野球記者協会の投票で、米国野球殿堂入りが決まりました。日本人初の快挙です。

投票総数394票のうち393票を獲得し、ヤンキースのリベラ（満票）、ジーター（1票足りず）に次ぐ3位の得票率でした。イチロー（呼び捨てごめん）は記者会見で、「満票に1票足りないのはすごくよかった」と言っていました。

イチローは1992年オリックスに入団、2001年に渡米しマリナーズに移籍しました。2019年の引退まで、日本のオリックスで9年、アメリカのマリナーズで11年半、ヤンキースで2年半、マーリンズで3年、最後はマリナーズに戻り2年と、アメリカで19年、日米通算28年の現役生活でした。

イチローのアメリカでの主な記録は、3089安打（日米通算では4367安打―史上初）、2001年からの10年連続200安打（史上初）、2004年の最多262安打（史上初）、入団した2001年にMVP、新人王、首位打者、盗塁王（まとめて取ったのは史上初）、オールスターでランニングホームラン（史上初、MVP）、10年連続ゴールドグラブ賞、などです。ほかにもう一度首位打者になっています。

ライトから3塁に矢のようなボールを投げて走者を刺したこともありました。レーザービームと言われて伝説になりました。

なおイチローは今年1月、ミスタータイガースの掛布選手や中日の守護神岩瀬投手と共に、日本の野球殿堂入りも果たしています。日米ダブルの殿堂入りとなりました。おめでとうイチローさん！